山梨県立大学　地域研究交流センター2019 年-2021 年重点テーマ研究報告書

穴切地区をモデルとした持続可能なコミュニティにつながる高齢者活動拠点構築

—コロナ禍での高齢者活動拠点構築手法の検討—

持続可能コミュニティ研究会
山梨県立大学　青柳暁子
杉山歩
安藤勝洋
高木寛之
鶴巻台東自治会長・山梨大学名誉教授　鈴木嘉彦
穴切地区自治会連合会長　相吉泰夫

2022 年 3 月

穴切地区をモデルとした持続可能なコミュニティにつながる高齢者活動拠点構築
―コロナ禍での高齢者活動拠点構築手法の検討―

青柳暁子、杉山歩、安藤勝洋、高木寛之、鈴木嘉彦、相吉泰夫

１．はじめに

本研究の目的は、穴切地区における高齢者活動拠点の構築過程(2019 年から 2021 年 11 月現在まで)を分析し、モデルケースとして提案することによって、他地区や市町村での健康長寿のための活動拠点構築手法案作成の資料を提供することである。

穴切地区の高齢化率は令和 2 年度には 33.6%と高く、甲府市全体の高齢化率 29.5%を上回っている [1)]。この状況を受けて穴切地区では、鶴巻台東自治会の鈴木嘉彦自治会長が中心となり、高齢者の健康長寿のため 2019 年から高齢者活動拠点の構築活動を開始し、2021 年 11 月現在まで継続して主催している。これは高齢者の健康長寿を図るため、運動・工芸・遊び・ボランティア活動などを展開していく活動で、旧穴切小学校で行ってきた。具体的には旧穴切小学校の 1 教室ごとに運動や工芸などのメニューを用意し、地域の高齢者が来所して好きなメニューの運動や工芸に自由に参加できるようにセット・実行するという内容である。またこの活動では、地域高齢者がスタッフとなって各メニューの講師や運営・予算運用を行っており、それには対価が支払われることから、働く場の提供による高齢者の活性化創出という側面が存在する。一方、参加者からは一定の料金を徴収する予定がある。さらに、旧穴切小学校校庭で、作成したもの等を販売するフリーマーケットを開催し、高齢者のいきがい創造や社会参加の機会提供を行う。

厚生労働省は健康長寿を支える概念である介護予防について、個々の高齢者の生活や役割の向上を通じて、生きがいや自己実現を図ることにより QOL の向上を目指すものとしており [2)]、穴切地区での鈴木自治会長が行っている活動はこれらを網羅しているといえる。

現在はコロナ禍のため、当初の予定を変更し、旧穴切小学校に希望者を集め、ユーチューブの運動や脳トレーニングのコンテンツを使用し、モニターを見ながら運動や脳トレーニングを行っている。コロナ禍が収束後に再度、元の活動に戻す予定にしている。

なお、この活動に特に名称はないが健康長寿のための活動であるためここでは、「穴切地区健康長寿活動」という名称とする。

この活動の発案と活動の中心は鶴巻台東自治会の鈴木自治会長である。2019 年当初、鈴木氏が穴切地区の各地域組織へこの活動への参加呼びかけを行ったが、どの地域組織も否定的回答であった。しかし鈴木氏は、根気よく地域組織や住民に説明を続け、穴切地区自治会連合会長や社会福祉協議会職員が支援した結果、2021 年 11 月現在では少しずつ参加希望者・参加地域組織も増え、現在は地域組織の枠を超えて参加者が集まり、不定期であるがコロナ禍用のプログラムで活動が開催されている。

穴切地区健康長寿活動は地域高齢者の健康長寿に資するものであり、地域での高齢者の社会参加や生きがい創造のモデルとなると考えられる。特にこの活動の経過は地域組織が協

力困難であったところから始まっているため、地域組織が協力困難である地域においては重要な示唆を得られる経過だと考える。
以上のことから穴切地区健康長寿活動の今までの経過を M-GTA によってモデル化し、他市町村・地区への地域高齢者の健康長寿活動に資する資料を提供したいと考える。

２．調査概要
１）調査対象
高齢者活動拠点構築活動を推進してきた自治会長とそれを支援してきた地区自治会連合会長、社会福祉協議会の地区担当者
２）調査方法
①対象者に対して、半構造化聞き取り調査を個別面接で行い、2019 年から行ってきた高齢者活動拠点構築の過程についてのデータを得る。聞き取り調査では、同意を得て録音を行う。質問内容は以下のとおりである。
a) 2019 年の構築当初の状況をどのように捉えていましたか
b) 現在の状況をどのようにとらえていますか
c) 2019 年の構築当初から 2021 年 11 月までの経過を教えてください
d)コロナ禍では高齢者活動拠点構築はどのように変わりましたか
聞き取り調査で得た内容を逐語録にし、KH-coder によるテキストマイニング、M-GTA を参考に分析を行った。
３）倫理的配慮
個人の情報・データ等の取扱い及び発表の方法等に関わる事項を含んだ主旨説明を、説明書を用いて行い、同意書に押印を頂いた。
４）分析方法
本研究では研究対象がプロセス的特性を持っていること、実践を理論化するという点 1)から修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（以下 M-GTA）を分析方法として参考に質的分析を行った。()
分析手続きの詳細は以下のとおりである。
① データ収集は半構造化インタビューを用い、2021 年 11 月～12 月に 3 名の対象者に対して行った。分析に使用した録音時間は 173 分であった。
② インタビュー内容を逐語録におこした。
③ 逐語録の中から、「高齢者拠点構築のプロセス」に関連する文章を、分析ワークシートのヴァリエーションとして転記し、ヴァリエーションから解釈し、概念名と定義を決定し記載した。
④ 解釈の際の判断基準となったキーワードを理論的メモに記載した。(図１)
⑤ ①～④までの手続きを調査対象者 1 名ごとに行った。
⑥ 理論的メモを手掛かりとして全ての概念を表にまとめると同時に概念間の関係を

まとめ、結果図にした。(図 2)

⑦　分析ワークシートと結果図、表、逐語録を確認しながら、再度見直し作業を行い、概念や結果図の修正を行った。

⑧　共同研究者に概念と結果図を提出し、意見を募った。

⑨　意見を基に修正を行った。

⑩　出来上がった結果図を基に記述的説明であるストーリーラインを作成した。

概念	わかりにくさ
定義	具体性がなく、活動のイメージをしにくい。何を求められているかがわからない。
バリエーション	リファレンス 1 この高齢者の拠点構築をしていくというところに、どうそれぞれが参画をしていくなんていうところにイメージがちょっと付きにくかったところがあったのかなと。自分たちが各団体でいろいろ活動してるっていうところ、それぞれの団体さんで、これまでの活動の経緯なり、そして特に歴史のある活動をされている団体さんもある中で、そこと自分の団体とこの活動がどう、こう結び付いていくのかというところが、最初の「せーの」でこう、集まって話をするっていうのがちょっとしにくかった部分があって、 リファレンス 2 やっぱり実質、なかなかイメージがちょっと付かないのかなという課題が出てきている中で、やっぱりイメージ付けとしてこう、実際に、実践に入っていこうという形での考えで進まれていくのは、プロセスでやっていくのが良いのかなというふうに私は思いましたし、その形でちょっと見える化というか、見た中で、「ああ、こういうイメージなんだな」ということが少し皆さんの中でイメージ化されて、そしてじゃあ、自分のできることは何だろうなというふうに考えていただけるきっかけにはなるのかなとは思うので、その方法でやれれば本当はよかっただろうなというふうに思いますけど、
理論的メモ	持続可能な社会、地域という言葉や概念の説明が会議等や打ち合わせでなされた。説明された内容には賛成だが、その概念のために何をすればよいのかが具体的ではなく、どう判断すべきかわからないという雰囲気であった。

図 1．分析ワークシート例

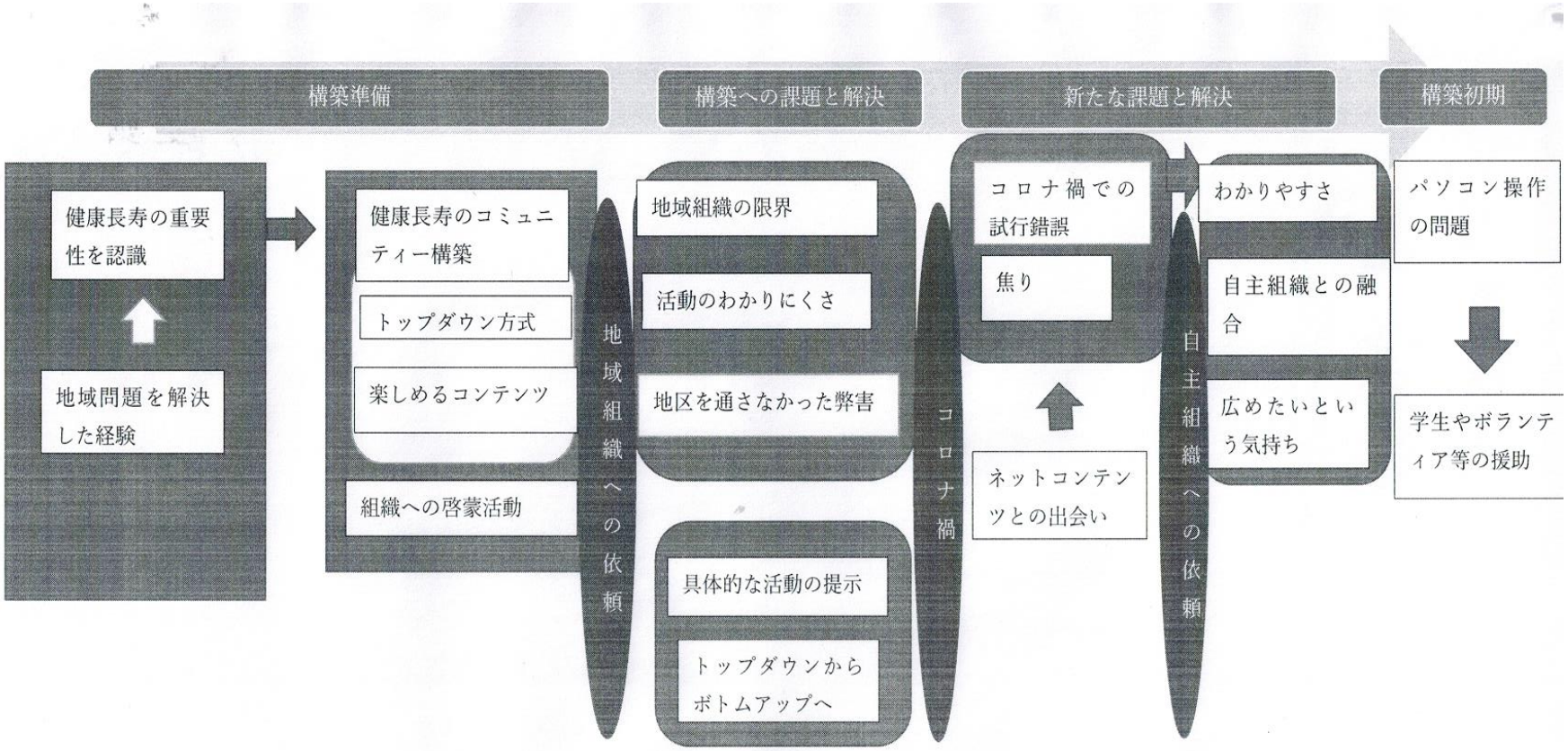
構築準備
構築への課題と解決
新たな課題と解決
構築初期
健康長寿の重要性を認識
地域問題を解決した経験
健康長寿のコミュニティー構築
トップダウン方式
楽しめるコンテンツ
組織への啓蒙活動
地域組織への依頼
地域組織の限界
活動のわかりにくさ
地区を通さなかった弊害
具体的な活動の提示
トップダウンからボトムアップへ
コロナ禍
コロナ禍での試行錯誤
焦り
ネットコンテンツとの出会い
自主組織への依頼
わかりやすさ
自主組織との融合
広めたいという気持ち
パソコン操作の問題
学生やボランティア等の援助

図 2.　結果図

３．結果

ストーリーライン

プロセスに関する分析結果を以下、結果図を基にストーリーラインとして記載する。

分析の最小単位である概念名を【　】、カテゴリーを＜　＞、サブカテゴリーは「　」、バリエーションの一部抜き出しは『　』出来事は（　）で記述する。

最初に＜構築の動機と準備＞があった。「構築の動機」としてはまず【地域問題を解決した経験】がある。『東日本大震災後に自治会員が大丈夫ですというのを出すが自治会長のやり手がなくって、毎年組長の中で交代で自治会長をやるっていうことになって、途中からそういうリストすらない。そこで・・・全部 1 つのリストにした。』『みんな高齢化して、介護を受けるような状況になっていくのを見て、健康で楽しめる方法っていうのを考えないといけない。そこで実はいきいきサロンは助成金が出るからやったらどうかと思うと地区の人に提案した。そうしたらぜひやりたいと。地区の住民が言うには、実はもう毎年来るんだけど、自治会長が毎年代わっちゃって、そんなこととてもやってもらえそうもないので、できるんならぜひやりたいと。そして婦人部長さんと福祉推進委員がそれこそ回ってあっという間にリスト作ってくれた』というような【地域問題を解決した経験】があり、これが【トップダウン方式】を選択する基盤となった。また【地域問題を解決した経験】が【健康長寿の重要性を認識する】切欠となった。一方で＜構築の条件整備＞として【トップダウン方式】で行うこと、『日本老年学的評価研究機構が出している報告書の中に特に高齢者で嫌なものに無理やり参加されるとすごいストレスになると書いてある。』『やりたい人が、興味を持った人が参加するっていうのが大前提。』であることから【楽しめるコンテンツ】を作ることが必要であり、【トップダウン方式】で構築を成功させるための『食生活推進員、文化協会、シニアクラブに説明に行った。』などの地域【組織への啓蒙活動】が必要であった。これらの基盤が固まったところで（地域組織への依頼）を行った。しかし『地域組織の高齢化』や地域組織の『維持だけで精いっぱい』という【地域組織の限界】があるとともに、依頼した活動が『具体的なイメージがつきにくかった』という【活動のわかりにくさ】があり、これらが「構地域組織が動くには至らなかった。また地域組織に依頼するのではなく『自治会を通せば活動が可能であったかも』しれないが、【地区を通さなかった弊害】によって活動は一旦とん挫した。

この「課題解決」として『ワークショップをやってみる』という【具体的な活動の提示】を行うことや『グラウンドゴルフをしている人達から話を聞く』といった【トップダウンからボトムアップ】の方法をとることになった。

しかし、（コロナ禍）によってこれらが中断された。

『このままいくと本当に高齢者たち、どんどんどんどん閉じこもっちゃう』『何とかこれを打破するっていうかな、みんなで集まって楽しめるような方法を考えないと年寄りがたいへんなことになっちゃう』という【焦り】から『どうすれば、じゃあみんな集まって一応、納得してくれる、楽しんで、このくらいなら集まってもいいやという方法になるかな

って』【コロナ禍での試行錯誤】の末、『何かYouTubeって名前は聞いてたけど、見たことなかったんだけど、実は高齢者の健康のためにとか楽しみのためにっていう番組がものすごくたくさんあるんだということに気が付いて、』というように【ネットコンテンツとの出会い】があり、これを基にした活動を行うことになった。

『いきいきサロン出向いて皆さんに見てもらう』『皆さんで情報交換しましょうなんていう中で情報交換の場を設定していく。その中でサロンの 1 つの活動の形として提案』という【自主組織との融合】を行ったことや【わかりやすさ】、地域の人の【広めたいという気持ち】によって「連携しやすい条件」ができ、この形の活動が広がることになった。しかし、ネットコンテンツを使うため【パソコン操作の問題】というあらたな【連携の課題】ができ、その「解決方法」として【学生やボランティア等の援助】が考えられた。

４．考察

今回明らかになったプロセスによって３点が重要であると考えられた。１つ目は地域組織への依頼から自主組織への融合に方向性を変えたこと、2 つ目は新しいコミュニティ構築の中心人物が自主組織に以前から関わっていたこと、3 つ目はわかりやすさが重要であることである。以下、各項目に説明を行う。

１．地域組織への依頼から自主組織への融合に方向性を変えたこと

地域組織には様々なものがあり、歴史が長く、全国的な組織として民生委員や愛育委員、シニアクラブなどがある。また地区ごとに文化協会や体育協会などのレクリエーション的な組織や食生活推進員などの啓蒙組織が存在する。しかしこのような組織は歴史が長いほど、形式化しており、各委員は自主的に参加するというよりは地域住民が輪番制で担当したり、自治会などからの依頼で行ったりしている。また、長い歴史の中で様々な規則や制約ができて、自由に動くことが困難である。さらに地域住民に高齢化により、活動が困難になりつつある。このような状況下にある地域組織を新しい活動の先導役とすることはむつかしい。特に各地域組織は自治会という枠の中では協働しているが、その枠外では別々の目的を持った組織であるため、一つにまとまり、自治会の枠外で新しい活動への参加は困難であった。今回の新しいコミュニティ構築の方法としては成功のためには１．自治会を通して依頼をするか２．地域組織を一つに絞って依頼をするか、今回のように３．地域組織ではなく自主組織に依頼をするかという選択があったと考えられる。

日本の高齢化率の増加とともに地域組織の高齢化も進んでいるため、今回のこのような新規のコミュニティ構築は地位組織への依存はどの地域においても困難だと考える。日本の、特に都市郊外で新たなコミュニティを構築するために地域の団体に依頼をする際には上記の３点が重要であることが理解できた。

今回の成功は自主組織への依頼だと考える。近年増加している自主組織のひとつであるいきいきサロンは地域組織のような様々な規則がなく、自由に行動ができる。特

に地域組織との大きな違いはその士気にあると考える。そもそもいきいきサロンは地域高齢者の居場所や交流を目指して主催者が自主的にサロンを作り、参加者と一緒にしたいことをするという組織であり、新しいコミュニティの活動（ネットコンテンツを使った楽しみ）と親和性があった。同じ方向性を持った活動を自主的に行っているため、士気が高く、今回のコミュニティ構築に影響があったと考える。

２．新しいコミュニティ構築の中心人物が自主組織に以前から関わっていたこと

コミュニティ構築の協力依頼を地域組織から自主組織へ変更できたのは、コミュニティ構築の中心人物が自主組織に関わっていたことが大きい。自主組織に以前から関わっていたことから、同じ自主組織間で仲間意識ができたのではないかと推測する。

今回、新しいコミュニティ構築の中心人物が自分が開催しているのと同じ自主組織間での情報交換会を呼びかけ、その中で新しいコミュニティの活動を紹介したこと、アンケートを取って自主組織個々の参加自主性を尊重したこと、また前述のように同じ方向性を持った活動への参加依頼であったこと、さらに同じ地縁を持つことから、自然と仲間意識が生まれ自主組織への依頼が成功したのだと考える。

３．わかりやすさ

当初地域組織に協力依頼をしたときはイメージがつきにくいため、地域組織個々が何を求められているのかがわかりにくかった。また、今までの地域組織内での活動経験から準備に非常に膨大な時間と労力を必要とするという感覚を持ったと考える。実際に行っている地域組織内行事は 100 名近くの高齢者に一カ所に集まってもらい、食事をするというような大きなものであるため、そのイメージで協力が困難であるとの回答であったと推測する。

一方で自主組織に協力依頼したネットコンテンツを使用した活動は内容が明確で必要な物品も少なく、パソコン操作をするが 1 人いれば簡単に行える。何をするか、何が必要かが明確で、自分の組織で使用可能かを簡単に推し量ることができる。このようなわかりやすさが自主組織の協力を得る後押しになったと考える。

５．結論

高齢者活動拠点構築の当事者からこの 3 年間で楽しみを活用した活動を行うことで高齢者活動拠点を構築しようとしたプロセスをインタビューし、分析して概観した。この一連の流れから地域において高齢者のための新しいコミュニティを構築するために必要な条件が明らかになった。

すなわち、「自主組織の存在」、「構築当事者の地域（地域に存在する組織）へのコミットメント」、「わかりやすい活動内容」である。当然ながら高齢者が集まって楽しい何かを行いたいというニーズはあり、それを踏まえてコミュニティを構築する際にはこの 3 つの条件は必須であると考える。

最後に予測される学問的・社会的な貢献として本研究は学問的貢献としては、以下の点があげられる。すなわち、高齢者活動拠点構築の過程を調査・分析することで構築のため

の手法を開発する一助になる。また、社会的貢献としては高齢者活動拠点構築過程を明確にすることで他の自治体や大学が地域で組織構築を行う際のモデルを示すことができる。

さらに当初この活動に対して地域組織が協力困難であったが、地域組織が協力困難な地域に対して高齢者組織等を構築するための有効なモデルを示すことが出来る。

大学が地域にコミットすることを求められるようになって久しい。地域で大学と地域住民が共同でカフェや組織を興すことが盛んになされている。しかし大学が組織等を住民と興した結果報告や構築過程の事例報告がされているが、その過程について客観的分析手法によって明確にしたものは僅少である。これは地域の特徴や参加住民の特性などによって構築過程が個々に異なるため、統一したモデル作成は困難であるためと考えられる。しかし、組織構築過程の客観的分析を積み重ねることによって共通する因子が明確になり、モデルが形作られると推測される。大学の地域へのコミットが年々強く求められる中、地域組織の構築を容易にする過程モデルを生成することが課題である。

＜引用文献＞

1)甲府市：高齢者いきいき甲府プラン　令和 3 年度-令和 5 年度，p.15,2021.

2)厚生労働省：介護予防マニュアル,p1,2012.

3) M-GTA グラウンデッドセオリー・アプローチの実践　質的研究への誘い　木下康仁 弘文堂 2017.P90

3年間の調査研究から明確になったこと

鶴巻台東自治会長　鈴木嘉彦

この1年ほどの間に「SDGｓ」は広く行政や企業などで共有される言葉となった。しかし、本研究の主題である「持続可能な高齢者コミュニティーの構築」が、SDGｓの重要な課題の一つであるという認識は必ずしも共有されていない。

持続可能な社会づくりを、研究教育の主題として30年以上取り組んできた筆者の判断では、「持続可能な高齢者コミュニティーの実現」は、現在我が国にとって、最も重要なSDGｓのテーマの一つである。

この考えに至ったのは6年ほど前、それまではSDGｓの対象として、温暖化やエネルギー、廃棄物問題を重要課題として取り組んできた。ところが、地元の自治会長を初めて引き受けた際、足元の地域における深刻な問題、つまり高齢化した地域ゆえに生まれる多くの問題に気付かされた。特に子や孫という未来世代へ、大きな負荷を残すことにつながる高齢社会の深刻さに驚かされた。

これを契機に、持続可能な高齢者コミュニティーの構築を新たな持続可能な社会づくりのテーマとして取り組み始めた。本研究で定義した「持続可能な高齢者コミュニティー」とは、健康長寿を実現し、小なりといえども付加価値を生み出す、高齢者のコミュニティーである。筆者のこの基本的な考えを、本研究代表者に聞いてもらう機会があり、結果的に山梨県立大学の重点テーマ研究と位置付けられることになった。

筆者は、30数年前「地球の物質的閉鎖性とエネルギー的開放性」に気づき、現代社会の発展の構造は、現代世代にとって都合の良い発展ではあるが、子や孫などの未来世代にとっては「大きな負荷を負わされる」発展であることを認識した。この時期、国連が「持続可能な発展」の概念を定義し、これからは「持続可能な発展」が社会のあるべき姿と決議した。先述したように、筆者はこの当時以来、温暖化、エネルギー、廃棄物問題などの持続可能な社会づくりの課題を研究教育テーマとして専門的に取り組んできた。

筆者が本研究にかかわることになった背景は以上であるが、本重点テーマ研究に取り組んだ結果、いくつかの大切な問題を認識することができた。特に、コロナ感染の拡大に直面し、持続可能な高齢者コミュニティー実現に対する困難さを体験した。以下実質2年間の調査研究から学んだことをまとめる。

重点研究テーマとして応募するとき想定した「持続可能な高齢者コミュニティー実現」のための必要条件は、既存の準公的地域組織の連携であった。つまり、持続可能な高齢者コミュニティーの実現には、地域のシニアクラブ、愛育会、文化協会、福祉協議会、自治会などの既存組織が連携することにより、持続可能な高齢者コミュニティーの実現に繋がると予想していた。

既知の研究報告等によると、健康長寿の実現に効果的な取り組みとして、地域高齢者が楽しみながら参加できる「サロンの実現」が知られていた。多様な経験や価値観、感性を持った高齢者にとって、楽しみながら参加したくなるサロンは、趣味の会、健康につながる運動、ボランティア活動、学習の機会、おしゃべりの場、など多様である。この多様性に対応するためには、地域の多様な既存組織の連携が有効と判断した結果である。

そこで、これらの関係組織の代表者に参加していただき、連携の可能性について議論する場を研究スタート時点で用意した。ところが、議論の場を通して明確になったのは、既存のこれら組織が新たに連携して、望ましいサロンを立ち上げるのは困難であるという事実であった。協議に参加してくれた組織の多くが、組織自身の高齢化により、新たな取り組みは困難であるだけでなく、組織の維持にも課題を抱えているという結果であった。

この事実確認に基づき、既存組織の代表者の賛同を得た、トップダウン方式による、地域サロンの開設は難しいと判断した。替わりに、既存の準公的組織とは別に、グランドゴルフやサロン、ボランティアなどの独自活動をしている、高齢者に集まってもらい、ボトムアップによる、目的実現の可能性について意見をうかがうことになった。

このための集まりを開催する予定日の直前に、コロナ感染が拡大し、意見聴取を目的とする集まりそのものが開催できない状態となった。当時、本研究会自身も開催できない状況となった。

筆者は、本研究とは別に、自身が所属する自治会で、健康長寿の自治会になりたいと、甲府市福祉協議会の助成を受け、「生き生きサロン」を立ち上げていた。この生き生きサロンもコロナ拡大のため開催できない状況が続いた。この状況下で、筆者には一つの大きな疑問が生まれていた。

コロナ感染予防のため、集まりを禁止することに対するメリットと、集まれないことによるデメリットである。感染予防のため集まりを禁止するのは当然と考えられるが、デメリットについてはあまり議論の対象となってはいなかった。介護予防、健康長寿につながるサロンの開催禁止は、高齢者の健康にとっては大きなマイナス要因となると考えられる。コロナ感染予防措置が長期化する中で、デメリットの解消につながる取り組みが必要と判断し、その方策を考えるようになった。

その結果、サロン開催場所を屋外とし、複数の高齢者が同時に参加できるメニューを用意し、リーダーが声を出してリードするのではなく、スピーカなど機械音による方式ならば、サロンを開催できるという結論に至った。これは、スクリーンか大型テレビを利用し、動画を放映する方式で可能である。一度のプログラムの中に、健康体操、認知症予防につながるクイズ、趣味の取り組みなど、多様なメニューを、それぞれあまり長い時間ではなく、楽しめるよう構成することが有効ではないかと予想した。

この想定に基づいて、YOUTUBE で公開されている多様な高齢者向けの動画を調べると、サロンで有効に利用できると思われるものが多数存在することが確認できた。これらの動画をパワー・ポイントで編集し、1 回のプログラムを構成してみた。ちょうどこのこ

ろ、甲府市が旧穴切小学校に「協働支援センター」を開設し、ソーシャルディスタンスを確保したうえで、サロンを屋内で開催でき、大型のテレビも利用できる条件が整った。

筆者が所属する生き生きサロンで、会場として当協働支援センターを利用し、試行的にこのプログラムを実施した。結果的に参加した高齢者に好評であり、その後、今日までコロナ下でも開催可能なサロンの方法として継続している。

この実績を受け、コロナ下でも、持続可能な高齢者コミュニティーの実現に繋がるサロンの開催方法と判断し、地域福祉協議会の懇談会や、グランドゴルフの参加者、実施を希望する自治会などに、プログラムの紹介を行った。

プログラム紹介に当たっては、別紙のアンケートを実施し、参加者の率直な感想を調べた。その結果、いずれの参加者においてもプログラムは好評であった。さらに多くの参加者が、自分の所属する自治会でも、このようなプログラムを開催したいという結果であった。しかし自分たちだけでパソコン操作を含めたプログラムの実現はむずかしいという感想が過半数を占めた。

これらの調査研究の結果から、今後教育研究組織として取り組むことが望まれる研究課題が明確になった。課題の一つは、サロンの開催方法に関するものである。サロンを開催するためには、指導者が直接声を出して参加者をリードする必要はないが、代わりに、動画を利用する必要がある。動画利用により、コロナ感染につながる可能性がある飛沫感染が予防できる。しかし、高齢者の集まりにおいて、多様な動画から構成されるプログラムが組み込まれたパソコンの操作は、困難と感じている高齢者が多い。プログラムを推進するためには、パソコン操作が十分可能な人材を確保する必要がある。この操作可能な人材をどのように確保するか、もしくはどのように養成するのか、という問題である。大学という教育研究機関として、この課題にどのように対応することが望ましいのか、検討することが望まれる。

第２の課題は、プログラムそのものの制作をいかに進めるかという問題である。今回試験的に作成したプログラムは公開されている YOUTUBE の動画の活用である。行政機関などが提供している動画を組み合わせて、健康体操やクイズ、朗読などから構成している。今後プログラムのメニューをどのように継続的に作成し、提供していくの、プログラムの評価をどのように行うのか、検討することが望まれる。

さらに地元の大学という教育研究機関が、これらの課題にどのように関与していくのか、特に福祉関係を学んでいる学生の学習・実践の場としてどのようにかかわるのが望ましいのか、検討することが必要と考えられる。

以上、２年間にわたる研究を通して学んだことのまとめとする。

別紙

いきいきサロン開催に関するアンケート

自治会名(　　)

以下の質問のご回答ください。

１．　現在サロンを開催している　　はい　　いいえ

＊いいえと回答した人は回答ください。

今後何らかの方法で開催したいと考えている　　はい　　いいえ

２．本日提示された DVD 利用サロンモデルについて、面白い、楽しい、役立つ、不要、と思った

ものを選んでください。

＊認知症予防についての解説（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊コグニサイズ（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊フレイル予防についての解説（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊フレイル予防体操（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊鈴木によるサロン開催の目的説明（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊健康体操（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊間違い探し（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊難読漢字（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊脳トレクイズ（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊朗読（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）
＊YOUTUBE の視聴（面白い、楽しそう、役立ちそう、不要）

３．本日のモデルサロンを自分の自治会(サロン)でも開催してみたい

はい　　いいえ

＊はいと答えた人は以下にご回答ください

自分たちのサロンのメンバーで開催できる　　はい　　いいえ
自分たちだけでは難しいので支援してほしい　　はい　　いいえ
提案されたサロンを開催すれば参加しそうな人数　　（　　）人位
サロンの会場は当甲府市協働支援センターでも良い　　はい　　いいえ
他のサロンのメンバーと一緒でも負い　　はい　　いいえ
現在開催しているサロンの会場に大きな画面のテレビがある　はい　いいえ